

崇武館  
館長 飛鳥宗一郎  
(宗雄)

## 先人の言葉から学ぶ（その13）

為せば成る 為さねば成らぬ 何事も

成らぬは人の 為さぬなりけり（5）

出典・・・上杉鷹山

### 5 上杉鷹山の家族と次の世代

#### (1) 鷹山の結婚

上杉鷹山は、⑧定重の隠居によって明和4年（1767年）4月24日（年月日は全て陰暦）16歳7か月で出羽米沢藩上杉家第九代藩主となり、2年後の明和6年に⑧定重の二女・幸姫（よしひめ）と江戸屋敷において婚礼の儀が執り行われた。幸姫の母は⑧定重の正室で尾張藩主・徳川宗勝の娘・豊姫で、三女を生むが幸姫の他は早世し残るは幸姫だけ、この時既に豊姫は亡く幸姫17歳であった。

新郎19歳、新婦17歳の年齢から似合いの夫婦と以为いいが、幸姫はカリエス（脊髄を含む骨組織の細菌による浸食疾患）病んで心身の発育が幼少時で止まった身体障害者であった。

そのような奥方を持ちながら、鷹山は誠意を尽くし朝な夕な幸姫の遊び相手になり、幸姫が天明2年に30歳で亡くなるまで優しく接したため、側女中たちは鷹山の振る舞いに涙していたという。彼は、周囲に対して『幸姫が身体障害者であることを一切漏らしてならない』と固く口止めをしていた。

また、父の⑧定重は、死後に届けられた僅か10歳ほどの形見の着物を見て初めて幸姫が身障者であったことを知り、『知らなかったとはいえ、治憲殿（鷹山）に済まないことをしてしまった』と涙したと伝えられている。殿様という立場の人は、身内についてさえ不明な場合があった。

当時の大名は世継ぎの心配が喫緊の課題であるため、複数の側室を置くのを常としていた。幸姫がこのような状態であるにも拘らず、鷹山は周囲の勧めを拒み江戸屋敷に側室を置くことをしなかった。代わって、国元米沢に④綱憲の第6子・勝延の娘「お

豊の方」を側室とした。お豊の方は⑧定重と従兄妹で鷹山より10歳年上、書道、歌道に通じる才媛として知られていた。

## (2) 定重と鷹山の子たち

鷹山の養子は宝暦9年(1760年)に内定した時点で、⑧定重には世子となる男子がなかったことは先に述べた。鷹山は翌10年正式に養子となるが、皮肉なことに同年2月重定に長男・勝熙が誕生し、明和元年(1764年)には二男・治広(後に第10代藩主となる)が生まれている。勿論、一度決まった鷹山の養継子の座は揺るぐはずはなく、彼ら二人は鷹山の養弟となる。

一方鷹山には、お豊の方との間に安永5年(1776年)に長男・顕孝が生まれ、天明5年(1785年)に鷹山が家督を⑧定重の二男・治広に譲ると、顕孝は治広の養継子となるが、寛政6年(1794年)1月江戸屋敷において疱瘡に罹って死去してしまい、第11代藩主の座に着くことなく19歳の生涯を閉じた。顕孝の死が江戸から伝えられると鷹山はいたく悲しみ、遺骸が米沢に着くと「十年余り見し夢はさめにけり 軒端に伝う松風の音」と歌に詠んでいる。この顕孝の教育に当たり与えた言葉が今回のテーマである「為せば成る・・・」であった。

顕孝誕生2年後の安永7年(1778年)、二男・寛之助が生まれるが1歳半で夭折している。鷹山はお豊の方以外に側室を持たなかったことと、重なる不幸によってその血筋を後に残すことはなかった。

## 6 鷹山の隠退と次の藩主

### (1) 鷹山の隠居と新藩主の誕生

天明5年(1785年)2月7日、第10代将軍・徳川家治に継嗣の治広とともに謁見して家督を譲り、19歳の第10代米沢藩主・上杉治広(1764～1822年、在位1785～1822年)が誕生した。鷹山は17歳で第9代藩主の座に着いて18年、働き盛りとっていい35歳の隠退であった。

健康上の問題があるわけでもなし、余りに早い引き際と思われるかもしれないが、それは深慮の末の決意からで、鷹山らしい引き際である。



米沢城跡にある鷹山の銅像

ア 腹心であり、鷹山と共に改革を進めてきた竹俣当綱が弾劾されて失脚。その5か月後に同じく側近筆頭の荏戸善政が『友義節操ともに相立たず』として隠居届を提出、藩政からこの二人が身を引いたことによる心の痛手。

## コメント

鷹山の手足となり、あるいは強力なブレーンとなって、藩政改革に疾駆した竹俣当綱にしてさえ失態を犯す。先月号6頁で書いた「七家騒動」による鷹山に対する重臣たちの反抗とは全く異なる現象であり、実に複雑な心境から発生した翻意だったと想像するが、今回は深く探ることを避けたい。

なお、荻戸善政の方は後年になり、鷹山の切なる要望に応じて復職する。

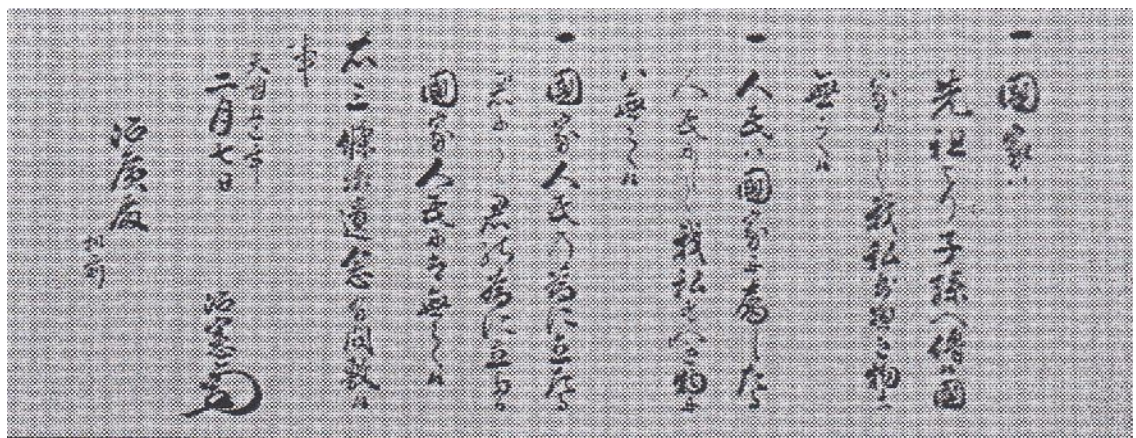
イ 鷹山がこのまま藩主の座に留まれば、「幕府普請役手伝い」が近々命ぜられる情勢にあると判断し、その後、治広藩主となって重ねて「普請役手伝い」が課せられるだろうと想定し、二度の手伝いを一度で済ませることを考えた。

ウ ⑧定重は、隠居後米沢城内の南山館という館に住まいしていた。鷹山の養父を思う心尽くしと言っていい贅を凝らした館であったが、天明4年(1784年)元旦に火を發し、折からの強風にあおられ瞬く間に灰燼と帰してしまい、⑧定重の失意は大きかった。武士の世界であるから、館の焼失と失意を直接の原因とするのは当たらないが、鷹山は60歳半ばの⑧定重が健在である内に、その実子の治広を藩主の座に付け安心させたい気持ちがあった。

## (2) 鷹山の藩主教育

隠居した鷹山は、新藩主・治広に対し「人君の心得三箇条」を伝授した。これを後世に「伝国の辞」と呼んでいる。

一、国家は先祖より子孫へ伝候国家にして、我私すべき物には無之候。  
一、人民は国家に属したる人民にして、我私すべき物には無之候。  
一、国家人民の為に立たる君にして、君の為に立たる国家人民には無之候。  
右三箇条遺念有間敷候事



これは、上杉博物館に残る鷹山自筆の「伝国の辞」である。

我私＝私物化、思いのままにしようとする考え。

無之候＝（これなく候）と読み、「そのようなものではない」。

遺念有間敷候事＝（いねんあるまじく候事）と読み、「思いを忘れてはならない」。

「伝国の辞」は、藩に関する考え方の基本であり、先月号2頁の「襲封の決意」で述べた『民の父母』の考えと相通じる言葉といえる。

#### コメント

封建時代の藩主たちは、藩を私有物の如く考え、思いのままに治世を行い家臣や領民の心情など考慮しない場合が多い。鷹山以前の米沢藩にしても然りと想像できる。

この三箇条は、『国家（藩）に属する人民（藩民）であって、人民のために藩主の座にあるのであって、藩主ためにある人民ではない』と明言することで、新藩主に対する論しとしたのは、やはり賓師・細井平洲の教導と、鷹山自身の本来備わっていた資質によるものと思う。

鷹山は、隠居後も陰に陽に⑩治広を支え借財を返還に奔走し、藩主の時と変わりになく藩政改革を継続するのである。

⑩治広は、『私は若年の未熟者ゆえ、危急ごとばかりの我が藩を預り、誤りなく政治を行うには力不足と痛感しております。何とぞ国主の座に慣れますまで、藩政は勿論、幕府との勤めの数々を、父上からご後見の立場でお指図を賜りたくお願い致します』と低頭した。

これに対し、『そなたはもはや若輩ではない。隠居の指図など無用と思って、ご自身が思うところを断固として行ってよいのだ』と言い渡しますが、直ぐに微笑みをもって労わりを示したという。

事実、鷹山は⑩治広を表に立てつつ、藩政改革のため支援し続けたのである。

### (3) 治広の世子と「為せば成る」の歌

治広が第10代藩主に着くと、鷹山の長男で10歳の顕孝（1776～94年）を養子とし世子（後継）と定めた。

鷹山は、顕孝の世子教育として優秀な藩士4名を傅役に選び任命した。彼らは日頃御側に居て教育に当たるので、その言行に接して人となり形成されるため、その心得として日頃物語るべきこと7項目と、物語るべきでないこと7項目を「壁書」（この言葉は法令等の定めを壁に書いて伝達した古代中国の方式に由来し、我が国では紙に書いて壁に張り出して行う内部通達のような場合をいう。「伊達政宗の壁書」や「水戸光圀の壁書」など著名である）として示した。以下その抜き出したものを記す。

◎ 世子に物語ってよしとするもの、

「孝悌忠信の話」（父母や年長者を敬ってこれに仕え、又は忠義忠孝の話）、「恭敬退讓の話」（慎みと謙讓の気持ちと、相手に粗略のない行為の話）、「壯士義武の話」（志し高い者の立派な義勇の話）、「諫諍論弁の話」（人の諫言を聞き入れ、善行を論じる話）、「農事耕耘の話」（農民の辛苦と、農耕難儀実際の話）、など。

◎ 語るべきでない話として、

「財利損益の話」(金儲けや損得論の話)、「飲食酔飽の話」(飲食の貪りや美味い拙いなどの噂話)、「奇技淫巧の話」(まやかし誑かす物語、男女間のふしだらな話)、など。

そしてその後、今回のテーマである歌。

『為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり』

を鷹山の信念として添えたのである。

この壁書から、鷹山の気性性格が良く読み取れる。几帳面で下世話を好まず、心に決めたことは必ずやり通す意思の強さである。この「為せば成る・・・」の歌は言葉が簡明で特段の解説も必要としないだろうが、少しだけ注釈を加えれば、

「為す」は「営為」や「作為」のように、あることに手を加えて完成させること。

「成る」は、作ろうとしたものが結果として出来上がることである。何かをしようとして「為す」行為行動を起こさなければ、どうして「成す」ことを完成あるいは完遂できるだろうかとなる。

養子の身ながら17歳で20万両(今に価値換算なら250億円程度?)という膨大な借金を抱えた出羽米沢藩。第9代藩主になるやいなや、若年とは思えない大胆な藩政改革に立ち上がり、幾多の妨害や困難を乗り越えて邁進した鷹山だから言えた言葉かもしれない。

実は、「為せば成る・・・」は鷹山のオリジナルでなかったのである。今はこの歌が出てくれば『上杉鷹山の歌である』と異口同音に答が返ってくるが、最初は中国最古の歴史書である「書経」中に「弗爲胡成(為さずんばなんぞ成らん)」とあり、次いで「風林火山」の旗印で知られ「甲斐の虎」と異名を取った戦国武将の武田信玄(1521~73年)が残した『為せば成る 為さねば成らぬ成る業を 成らぬと捨つる人のほかなさ』があるからである。しかし、何故「為せば成る・・・」は鷹山なのか。その理由は、この歌と鷹山の残した実績がイメージとして一致するからに相違ない。

空手道修業者も、「為せば成る・・・」の歌を日々心の中で唱えてほしい。決意したことをやり通す意思が行為に結び付けば、目標が明確になり行動のあり方が瞼の裏に明示される。目先不明のまま日月を過ごせば、これを無為といい努力は徒労に終わるからである。

#### コメント

⑩治広は、⑧重定の二男と先に書いた。長男は⑩治広と同母兄の勝熙(1760~1807年)であるが、勝熙は生来病弱で甘やかされ育った。性格や素行から必ずしも窮状の藩を維持するには相応でないのではと、⑧重定と鷹山との間で話されたのではと推測される。勝熙は藩主となることはなかったが、鷹山の長男・顕孝、次男・寛之助が早世し、治広の長男・久千代も同じく夭折したため、⑩治広の隠居後に第11代藩主となるのは勝熙の長男・斉定で、第12代・斉憲、第13代・茂憲(最後の米沢藩主)と、上杉家は勝熙の血筋が残るのである。



## (1) 鷹山政策の業績

新田の開拓に力を注ぎ、中国の例に倣った「籍田の礼」といって藩主自ら耕作する儀礼を行って範を示すなど耕地の開発ばかりか、際立った施策の一つとして「備籾蔵」（計画的な籾米の蓄え）がある。大飢饉の痛手を教訓として、藩によって郷村に至るまで建設して代官を配置し、平時においてさえ困窮農民の利用を可能とした。このように藩が管理運営する籾や米の備荒対策は、歴史上米沢一藩だけであった。

天明3年（1783年）の大凶作による「天明大飢饉」（全国の人国割減となった）で力を発揮し、藩内では餓死者や逃亡百姓を一人も出さなかった。

米沢には直江兼継（初代・上杉景勝の重臣）以来の勸農政策や伝統的特産品が存在したが、鷹山は漆（塗料、実から臘を取る）・桑（養蚕奨励）・楮（和紙の原料）の百万本植立てを計画して実行し、更に青苧（イラクサ科、高級繊維の材）などによる現金収入源を図ってる。



漆の木と実



桑と実



楮の畑

他にも、人口増加策、政務庁の経費節減、世襲代官制の廃止、郷村教導出役（領民の生活と農耕指導）、小野川温泉の製塩など多岐にわたる。又不労階級であった藩士家族の労働力活用は画期的な施策といえる。

中でも注目すべきは、他藩では黙認されていた「間引き」や「姥捨て」の禁止、老人や身障者に手当を出して生涯生活が可能な手立てを行い、違反者には罰を与えたという現代に勝る福祉社会の先駆けであろう。

列挙すれば枚挙にいとまない程、比類ない画期的な改革と政策の実施は、鷹山の藩主時代に、隠居後は治広との協同事業として行われるが、いずれも人情味あふれる温かさが付随していた。



青苧（別名・カラムシ）

## (2) 今に残る鷹山の足跡

ア 山形県立米沢興讓館高等学校～安永5年（1776年）に細井平洲を招いて藩校の再興を図り校名「興讓館」と命名し、藩士のみならず農民に至るまで学問の門戸を開き、維新後の旧制中学校時代は「山形県立米沢中学校」と称したが、学制改革を経て昭和31年（1956年）から現在の校名となった。興讓館の由来は、「四書」の中の「大学」にある『一家仁一國仁、一家讓一國興讓』からである。

イ 米沢織～高級和服素材の織物で、鷹山より以前は機織りの技術が乏しく、生糸や青苧から取れた繊維の大半は藩外に輸出されていたが、越後国（新潟県）小千谷や常陸国（茨城県）結城から織師と織工を招聘して藩士の婦女子に習わせ、家内工業の先鞭を付けた。紬、縮、黄八丈、袴地（仙台平と並び称される）、糸織、紋織などが主製品で、価値の高い織物として評判は高く、終戦後まで「機屋さん」は市内の至る所に存在した。長井や白鷹には伝統的な高級紬の技術が残る。

米沢市議会議員は、年間に何度か「米沢織」の紋服で議会に登場する日が定められている。

ウ 和紙の製造～米沢一円における和紙の製造は、地区ごとの特徴を持ちながら発達してきたが、今は白鷹町深山地区に残る「深山和紙」だけになってしまった。平成4年（1992年）に山形県下で完全国体として開催された「べにばな国体」の賞状は、「深山和紙」に県特産の「べにばな」の花弁を梳き込んで作成された。

エ 錦鯉と鯉料理～錦鯉は藩政時代に江戸で人気を呼んだが、今は他地区に押されてしまった。その名残は「米沢城址」のお堀に見事な錦鯉が悠然と泳ぐ姿で見ることができる。

高齢者や引退武士、子供たちの余暇を利用して鯉の餌やりは可能でないかとの鷹山の発想から始まった鯉の養殖は、冬期間の蛋白質、産後食や病人の栄養食として奨励され、今は「米沢鯉」として地域の祝膳に欠かせない食材として、3年以上育てた鯉の刺身（洗い）、骨まで軟らかく甘辛く煮た旨煮として、特段の美味評判を呼び、他県からの引合いも多い。



米沢鯉の旨煮

オ 笹野一刀掘り～米沢市笹野にある真言宗豊山派の「長命山幸徳院笹野寺」（通称・笹野観音、別名・あじさい寺）は開山以来1200年の歴史を持つが、古くから農民により参詣者の縁起物として売られえいた素朴な彫物に鷹山が着目し、『この技術は素晴らしい。このまま埋もれさせるのは勿体ないから、一層技術を磨き広く名を知らしめるよう力を注ごう』と、農民冬期間の副業を兼ねた特産の土産物として作成させ、鷹山が宣伝活動の先頭に立ったのに始まる。

これは、コシアブラ（ウコギ科の落葉高木）の丸木をサルキリという刃物を使って削る独特の技法で、それに単純な彩色を施すという民芸品で、代表作には「お鷹ポッポ」があり鷹山の象徴といえる。他にも「鶏」、「蘇民将来」、「恵比寿大黒」他がある。少数の工人の他に、農民の副業として製作されている。



長命山幸徳院笹野寺



笹野一刀彫・お鷹ポップ

カ かてもの（糶物）～寒冷地である米沢藩では、現在のように寒さに強い稲の品種もなかったため度々不作による飢饉に悩まされ続けた。鷹山はその対策として家老や医師たちに命じて数々の文献や体験を調査させ、飢饉克服のための備荒対策として天明3年（1783年）に「飯糧集」、享和2年（1802年）には「かてもの」を発刊し領民に配った。冊子には、約50科の植物から144種の救荒食物名と、その調理法を掲載しており、更に口にして駄目な毒物として「トリカブト」と「ハシリドコロ」（ナス科）の2種を挙げている。「キノコ」類が入っていないのは、字や絵で示すには難点があったからであろう。

米沢地区は山深く、豊かな自然に恵まれ山菜も豊富である。領民はその後の大凶作に遭っても、「備初蔵」と相まって餓死者や離散者を一人も出さなかった基因といえよう。

ところが、これを藩政時代の遺物と安易に捉えてはいけない。昭和16年（1941年）12月8日に始まった「太平洋戦争」の戦中戦後は、働き手が召集や徴用によって食料を始めとする極度の物資不足となり、米穀ばかりでない必需品が配給制度となった。その時政府は、鷹山作成のこの資料を基に、非常食として幾つか選び周知宣伝したのであった。当然ながら筆者も「かて飯」を食べ、野草を「おかず」として育っている。国民の全員が痩せ細っていた。

キ ウコギの生垣～ウコギ科の植物は食用とされるものが多く、山菜のウド、タラの芽、コシアブラなど、庭木として八手（やつで）、カクレミノ、著名なものにはオタネニンジン（通称は朝鮮人参、高麗人参）がある。ここで述べるウコギは落葉低木で葉と木には刺があって普通には野生が多い。薬用効果などにも着目した鷹山は、生垣として屋敷の周囲に植えさせ、刺のための侵入者（泥棒など）除けとし、非常時には食料として用いるよう奨励した。



このウコギは中国原産と見られ、実際に根や幹を煎じて薬用強壯剤として利用したり、天日干にした根や皮を焼酎に漬けた「五加皮酒」などの原料として用いられる。若葉は香ばしくて美味、お浸し、和え物、てんぷら、切り和え（茹でて焼き味噌と切り混ぜる）、炊き込みご飯など、今も盛んに食されている。

ク 灌がい工事～干ばつから守るため次の二つの灌がい大工事は、鷹山と⑩治広によって行われた。

藩士で和算に優れた黒井半四郎（1747～1799年）の建議によって、現在の赤湯・宮内地区の肥沃な土地に用水を引く「北条郷新堰工事」を寛政6年（1794年）に着工し、松川（最上川）から取水して延長約9里余（40km弱）を完成させ、460町歩（約460ha）の田圃が恩恵を受け今に至る。

同じく黒井は、藩内の飯豊山（高2100m）から二本の川が流れており、一方は白川となって米沢盆地に流れるが夏場に水量は少なく、もう一方の玉川（新潟県に至る）への流れは年間を通して水量が安定していることに着目して測量を行ったところ、僅か200mの隧道によって白川に疏水できると計算した。しかし、現場は固い岩盤（花崗岩）と1538mの高地にあって、作業は7月末から10月半ばの約3ヶ月と限られていた。この完成を危ぶむ声が多数を占めたが、遂に寛政11年（1799年）に「飯豊穴堰工事」は着工された。

間もなく指揮を取る黒井は過労のために死亡し、初年度はたった3.5mの掘進であった。後を荏戸善政（奉行）が受けるが荏戸も死亡、その子・政以が跡を継ぐがこれも死亡、大石豊綱の代になって文政元年（1818年）19年間の難工事はようやく完工した。飯豊穴堰を通水して水は盆地に入り、その恩恵を白川水系3,000haに恩恵をもたらした。しかし、



飯豊穴堰の遺跡

残念なことに昭和42年（1967年）の「羽越水害」に襲われた時、多くの土砂が穴堰に流入し、以後通水不能となってしまった。

ケ 頑固と反骨の気質、質素儉約の精神～今に至り、旧米沢藩内に住む人たちは同じ県内でも他地区とは人柄に違いがある。まず、風貌からして他者に媚びない凛としたところがあって、主張すべきことは信念に基づき明言する。思い立ったら頑張り通す、余計な贅沢や虚飾を張らない。それでも同調性がないわけではなく、信頼に足ると判断すれば意気投合の絆は固く、互助の精神も旺盛である。

これらは筆者の独断による米沢人像であるが、藩政時代、封建時代の米沢藩の状況からして、このような気質は引き継がれているように思う。



桜咲く米沢城趾と内堀



「越後の龍」上杉謙信を祀上杉神社（米沢市丸の内1丁目）



## おわりに

5ヶ月間にわたり、上杉鷹山にお付き合い頂いた。一度は同県人として書かなければと思っていた題材なので、つい多くの書面を使う羽目になった。

今の山形県は、昔は四つの藩によって分割されていた。米沢藩の他に北に隣接する山形藩（室町幕府一族の斯波兼頼以来、最上義光まで続く大藩）、戸沢家の新庄藩、そして酒井家の庄内藩である。今もって四つの地区は個別の方言を持ち、風習も相違し人々の性格に違いがある。

上杉鷹山という人物は、我が国の歴史上で稀有なリーダーシップと、豊かな発想力に加えて優れた人間性を持っていたことに異論を挟む人はまずあるまい。

その人間性とは、生来備わっていたときり思えない純粋で温かな思考力と、正直で誠実な性格から生まれる行動の全てである。加えて、細井平洲との師弟関係は幸運な巡り合わせであった。

鷹山は、文政5年（1822年）3月11日早朝、疲労と老衰のため睡眠中に死亡した。晩年よく口にしたのは、『藩主を継いだ時の借金をなくすること出来たが、まだ藩士の俸禄半減と借上金を元に戻してはいない。それが一番の心残りである』だったという。

その時、⑩治広は中風のため既に藩主の座を退いていたが、落胆は著しく鷹山の死後6ヶ月目の丁度同じ11日に他界した。

（終わり）

本稿の作成に当たり次を参考資料とし、又は一部を引用している。

- 1 飛鳥神社由緒抄、並びに同別考（飛鳥公民館）
- 2 山形県の歴史（著者：菅田慶恩・横山昭男、山川出版社）
- 3 米沢藩（著者：小野 榮、現代書館）
- 4 代表的日本人（著者：内村鑑三、訳者：鈴木範久、岩波文庫）
- 5 漆の実のみのる国、上・下（著者：藤沢周平）
- 6 武士道（著者：新渡戸稲造、訳者：奈良本辰也、三笠書房）
- 7 小説・上杉鷹山（著者：童門冬二、集英社文庫）
- 8 上杉鷹山の経営学（著者：童門冬二、PHP文庫）
- 9 「恥の文化」という神話（著者：長野晃子 草思社）